

[論文]

## 世界の不確定性について

乗立 雄輝\*

### — 目 次 —

1. 充足理由律とbrute fact
2. ルイスの奇妙な位置
3. ルイスの個体観
4. ライプニッツの完足個体概念と曖昧な述語
5. 充足理由律と曖昧さ
6. 曖昧な対象の肯定 — パースの個体観 —
7. 曖昧な対象を容認する意図とbruteness
8. 曖昧な対象を肯定する論拠 — (1) 経験科学の観点から —
9. 曖昧な対象を肯定する論拠 — (2) 数学的観点から —
10. 曖昧な対象を肯定する論拠 — (3) 論理的観点から —
11. 不確定な世界を探求する端緒としてのvaguenessとbruteness

キーワード：充足理由律、brute fact、曖昧さ

本論<sup>(1)</sup>では、曖昧性 (vagueness) と充足理由律との関わりを論じる。具体的には、以下のように議論を展開していく。

まず、曖昧さが対象そのものに属すると考える「曖昧な対象」(vague object) の存在を認めるならば、充足理由律 (the principle of sufficient reason) は

---

\* Yuki NORITATE 本学文学部准教授 (人文学科)

否定され、「根拠なく受け入れねばならない事実」(brute fact)の存在を容認することになることを示す。このとき、曖昧な対象のvaguenessと、brute factのbrutenessとは、確率的な不確定性として理解することが可能であることを主張する。ここから、充足理由律を否定し、brute factの存在を容認することは、世界の存在理由についての説明を放棄することではなく、確率的な不確定性が充溢する世界を理解することへ向けての端緒となるという展望を最終的に示したい。

## 1. 充足理由律とbrute fact

「なぜ、なにもないのではなく、なにかがあるのか？」(Why is there something rather than nothing?)というライプニッツの問いをめぐっては、大きく分けて二つの立場がある。それは、

- (1) 充足理由律を擁護し、「根拠なく受け入れねばならない事実」(以下、brute factと呼ぶ)を拒否する立場
- (2) 充足理由律を否定し、brute factを容認する立場

の二つである。

ここでいうbrute factとは、次のように定義できる。

それは、説明項(explanans)にはなるが、被説明項(explanandum)とはなりえない事実である。そのbrute factは「正しい」とすらいえない。なぜなら、「正しい」ということがいえるためには、その正しさが正当化されなければならないが、brute factは被説明項にはなりえないので、原理的に正当化されえないからである。また、正しいということが有意味であるためには、それが「間違っている」可能性がなければならないが、その可能性が最初から排除されているため、brute factを「正しい」ということすら有意味ではない。brute factの例として、基本的な自然法則に現れる「定数」(constant)や相対性理論における基本原理「光速一定の法則」などが挙げられるが、これらのbrute factによって、この世界で起きるさまざまな現象の性格が決定づけられるため、この世界の「個

性」(このもの性、haecceitas)を表すものとしても理解されるのである。

さて、先のライプニッツの問いのような「この世界がなぜ存在するのか？」という問いに十分に満足できる答え(すなわち充足理由)が見つからないとき、そこにbrute factが出現する。たとえば、初期の宇宙におけるインフレーションがどのような物理法則によって生じたかということが明らかになったとき、その物理法則が、なぜ、その初期の宇宙に「存在」(作用)したかということが説明できないならば、その事実はbrute factと呼ばれ、それ以上の説明が不可能なものとして「根拠なく受け入れねばならない」のである。

世界の存在理由に対する説明の放棄につながりかねないとして、このようなbrute factの存在を嫌う哲学者も多い。つまり、充足理由律を擁護し、brute factを拒否する(1)の立場の哲学者であり、その例としてノージック、レッシュャー、パーフィットらが挙げられる。

しかし、その一方で、充足理由律を否定し、brute factの存在を積極的に肯定する(2)の立場の哲学者たちも存在し、デヴィッド・ルイス[Lewis 1986]、パース[C.P.7.511]<sup>(2)</sup>などが代表格である。

## 2. ルイスの奇妙な位置

しかし、興味深いのは、この問題をめぐる議論の中でルイスが占める奇妙な位置である。というのも、ルイス自身は、ライプニッツの問いを「おめでたい問い」(‘a silly question’, Lewis 1970)と一蹴した上で、充足理由律を否定し、積極的にbrute factの存在を認めているにもかかわらず [Lewis 1986:128ff.]、彼の「様相実在論」(modal realism)が、brute factを拒否する(1)の立場の哲学者たちから盛んに援用される傾向があるからである。

ルイスの様相実在論とは、すべての可能性が個々の宇宙として独立して現実に存在するというものであるが、周知の通り、これは可能世界意味論の枠組みの中で考えられた図式であり、先のライプニッツの問いとは直接の関係はない。

しかし、それにもかかわらず、ルイスの様相実在論は、本人の思惑を超えてbrute factを拒否する立場の哲学者たちにとって格好の理論的枠組みを提供する。たとえば、アンガーは、ルイスの様相実在論が、この世界「だけ」が存在すると

いう恣意性 (arbitrariness) を消去するものとして高く評価する [Unger 1984]<sup>(3)</sup>。また、ノージックも同様の論法で、様相実在論を元にした「豊穰性仮説」(the fecundity assumption) を提出する [Nozick 1981]。極めつけはハドソンの以下のような主張だろう。

「充足理由律を復活させるためにかかるコストは、必然主義 (necessitarianism, すべての真理は形而上学的に必然的な真理であるというテーゼ) か、もしくは、ルイス的な様相の形而上学のどちらかを採用するということであり、どちらもまったく魅力的であるようには思えない」(Hudson 2008 p.13 [note 31])。

ルイス本人があればだけ充足理由律を否定しておきながら、なぜかその擁護者と見なされ、しかも「まったく魅力的ではない」などと切り捨てられるのは心外だろう。しかし、なぜ、これほどまでにルイスは「誤解」されるのだろうか？

### 3. ルイスの個体観

もちろん第一の理由は、ルイスの様相実在論が、「世界の恣意性」という brute fact を除去する、もっとも都合の良い道具立てだからである。「なぜ、なにもないのではなく、なにかがあるのか？」という問いは、「なぜ、このような世界が存在し、別のような在り方をしていないのか？」という問いをもはらむ。そして、ルイスの様相実在論をベースに豊穰性仮説を唱えるノージックの言葉を借りるなら、「<YではないところのX>についての事実などそもそも存在しないのだから、YではないところのXについての brute fact が説明されぬままになるということもありえない」からである (Nozick 1981, 129, 邦訳190頁)。

けれども、ルイスの主張が充足理由律を擁護するものとして誤解される理由がもう一つあると論者は考える。それはルイスが「曖昧さ」(vagueness) に対して取る態度であって、それが充足理由律と表裏一体をなす個体観 (ライブニッツの「完足個体概念」) と相性が良いからである。これと先の様相実在論の枠組みが一つになったとき、ルイスの主張が充足理由律を擁護するのに好都合に思えるのである。

さて、その曖昧さをめぐる議論の中に、

(a) 曖昧さは対象および世界とわたしたちの言語との関係、もしくは言語そのものの曖昧さに由来するもの (epistemic vagueness) であるという立場 (認識的見解 the epistemic view)

(b) 曖昧さは対象そのもの (もしくは、世界そのもの) が有する曖昧さに由来するもの (ontological vagueness) であるという立場 (存在的見解 the ontic view)

という対立軸がある。

ルイスは明確に (a) の立場をとる。よく参照されるルイスの言葉を引用してみよう。

「曖昧さについての理解可能な唯一の根拠は、われわれの思考と言語に求められる。未開拓奥地 (outback) がいったいどこから始まるのが曖昧な理由は、不明確な境界線を持ったそのようなもの、すなわち未開拓奥地が存在するからではない。むしろ、異なる境界線を持ったたくさんのものであるからであり、それらの中からあえて一つを選んで「未開拓奥地」という言葉の公式な指示対象としようとするほど誰も愚かではなかったからである。曖昧さは意味論的な非決定 (semantic indecision) なのである」 (Lewis 1986: 212)。

ここに見られるように、ルイスは、曖昧さを対象 (個体、そして世界) の側に帰属させない。ルイスによれば、一見して、「曖昧な対象」 (vague object) が存在しているように見えるのは、わたしたちが、その対象についての多くの「精確化」 (precisification) の間で、どれが本当のものなのかということを取って未決定の状態にしておいているからなのである。したがって、どれだけ曖昧に見える対象であっても、その対象そのものは確定的な (determinate) 存在である、ということになる。

## 4. ライプニッツの完足個体概念と曖昧な述語

さて、このルイスの個体観は、ライプニッツの体系において、充足理由律と表裏一体の関係を取り結ぶ「完足個体概念」(notion individuelle complète)と相性が良い。

ライプニッツによれば、あらゆる真なる命題においては、すべての述語が主語に内在している (G. II, 56, アルノー宛書簡)。このとき、個体名を主語とする個別的・偶然的命題が真であるならば、その主語によって示される個体概念には、それにあてはまるすべての述語が含まれていなければならない。ここで、その述語の系列が有限であるか (必然的命題)、無限であるか (偶然的命題) にかかわりなく、

- (i) 互いに矛盾する述語が含まれていない
- (ii) 曖昧な (不確定なindeterminate) 述語がない

という二点を満たすことが、ここの議論の文脈では重要である。

もう一度、ルイスが曖昧な対象を否定する議論をこれに重ねあわせてみると、曖昧な対象を指示する主語のうちには、(本当はそうではないとルイスは考えているのだが) 確かに「曖昧な述語」が存在する。しかし、繰り返しになるが、それは意味論的非決定にとどまっているが故に曖昧なだけで、実際に曖昧な述語によって表象されるような「曖昧性」が対象に属しているわけではないとルイスは主張するのである。

曖昧な述語をVPとし、それをルイスの立場から解釈すれば、無数の精確化(P)を表す述語の選言として理解できる。たとえば、曖昧な述語VPを「ある時点におけるXの長さは $a \pm 0.1\text{mm}$ である」としたとき、それは以下のように表される。

$$VP = P_1 \vee P_2 \vee P_3 \cdots \vee P_n \quad (P_1 = a - 0.1\text{mm}, \dots, P_n = a + 0.1\text{mm})$$

したがって、もし対象に曖昧な述語VPが含まれていたとしても、それは意味

論的決定（たとえば厳密な測定など）を施すことにより、選言肢の一つ、すなわち一義的な述語Paに絞ることが可能なはずであり、他の選言肢は削られることになる。つまり、ライブニッツの充足理由律を支える、互いに矛盾しない述語が内在しているとする個体概念と、ルイスの個体概念とは、「意味論的決定の有無」という膜を隔てて／媒介して、ぴったりと寄り添っていると考えてよい。

逆に、曖昧な対象を認めてしまうことは、曖昧な述語によって表象される性質を、その対象に帰属させることになる。この場合の、曖昧な述語とは、複数の異なる精確化が「同時に」正しくなってしまうような述語として理解できる。先に、ルイスの観点からすれば、曖昧な述語は無数の精確化を表す述語の「選言」であると述べたが、曖昧な対象を認める立場は、これを「連言」として理解するのである。先の例を用いると、以下のように表される。

$$VP = P_1 \wedge P_2 \wedge P_3 \cdots \wedge P_n \quad (P_1 = a - 0.1\text{mm}, \dots, P_n = a + 0.1\text{mm})$$

このとき、曖昧な対象は、すべての連言肢を正しいものとして内在させている。しかし、ある物体の長さが、同時点で、 $a - 0.1\text{mm}$ でもあり、 $a + 0.1\text{mm}$ でもあるというのは、明らかに、ライブニッツの主張する個体概念の要件(i)「互いに矛盾する述語が含まれていない」に反する。ライブニッツの主張に沿うと、矛盾する概念を含んでいるならば、その概念を含む主語概念が指示する個体は端的に「非存在」である [cf. 石黒1984:198]。

したがって、ライブニッツの充足理由律を擁護しようとするならば、曖昧な対象の存在を認めることはできず、この点においてルイスの曖昧性についての態度と合致する。

## 5. 充足理由律と曖昧さ

以上のことが明らかとなれば、充足理由律と「述語の主語への内在説」をセットとして考えるライブニッツの図式を前提とする限り、以下のようなことがいえるのではないだろうか。

まず、

(1) 充足理由律を擁護しようとするならば、曖昧な対象の存在は認められない。

それと同じことだが、(1) の対偶として、

(2) 曖昧な対象の存在を認めるならば、充足理由律を擁護できない。

また、

(3) 「曖昧な対象の存在を認めないならば、充足理由律を擁護することになる」とは、必ずしもいえないのは確かである。しかし、曖昧な対象の存在を認めないならば、充足理由律を擁護し、brute factを否定する主張に好都合な「環境」を提供してしまうことは避けられない。まさにこの点において、ルイスは充足理由律の擁護者と見なされたのではないだろうか<sup>(4)</sup>。したがって、曖昧な対象の存在を否定するならば、充足理由律に関してなんらかの態度決定を迫られる可能性がある<sup>(5)</sup>。

## 6. 曖昧な対象の肯定 — パースの个体観 —

さて、曖昧な対象の存在を認めるならば、brute factの存在を容認することになる。このことは、曖昧な対象のvaguenessと、brute factのbruteness, brutalityとの間に深い結びつきがあることを示唆しているのではないかと論者は考える。

ここでパースの个体観にふれてみたい。パースは曖昧な対象（実在的なあいまいなもの real vagues, C.P.5.453）の存在を認め、その自説を「スコラ的实在論」(scholastic realism) と呼び、ライプニッツを「个体についての唯名論」(individualistic nominalism, C.P.6.393) と批判する<sup>(6)</sup>。ここからも分かるように、パースが「实在論／唯名論」という枠組みを持ち出すとき、そこで議論の対象となっているのは「普遍」ではなく「个体」なのである。しかも、パースが対象としているのは、いかにも曖昧そうな砂山、毛のフサフサした猫、雲、エヴェレスト山などではなく、自然法則の定数や、目の前にある普通の物体の連続量（長さ

や重さなど) など、いかにも確定的であるようなものたちなのである。<sup>(7)</sup>  
さて、そのパースの个体観は以下のようにまとめられる。

(A) すべての対象は、それ固有の連続量を持つが、その量(値)は常に不確定的(曖昧)である。

このパースの主張は、一見して輪郭のはっきりしているように見える普通の物体が、確定的な長さ、重さなどを持たず、曖昧な長さや重さを持っているということの意味する。ここで注意すべきなのは、ある対象の持つ固有の連続量が、温度や湿度などのさまざまな条件によって変動することを「不確定性」や「曖昧さ」といっているのではないということである。そうではなく、たとえ他の条件がすべて同じであっても(ceteris paribus)、その対象の連続量は不確定的であろうということである。ある対象は、「A mm」という確定的な真の値(true value)を持つのではなく、常に、「 $A \pm 0.1\text{mm}$ 」という幅を持った不確定な真の値を持って、私たちの前に現れているのである。

これは、わたしたちの日常的な感覚と信念から懸け離れた見解のように思える。次に挙げる、曖昧な対象を否定するルイスの意見の方が多くの共感を得るのではないだろうか。

「・・・曖昧な物体について私自身そもそも正しい観念をもっているのかどうか疑わしい。たとえば、どうやって、空間的延長においてあいまいであるような一つの物体というものを考えればよいのだろうか」(Lewis 1993:169, 邦訳11頁)。

では、パースは、どのような意図と根拠からこのような奇妙な主張をなすのだろうか。やや長いが次の文章を引用してみたい。

「・・・ある連続量は、ある一定の正確な値を持つ(certain continuous quantities have certain exact value)というのが必然主義的(necessitarian)立場の本質である。さて、確率誤差(蓋然誤差 probable error)が完全にゼロであるような連続量の値を測定(observation)はどうやって決定できるのであろうか。他のすべての測定を精度において凌駕している、質量、長さ、角度についてのもっとも精緻な比率ですらも銀行の預金口座の

正確さにははるかに及ばないこと、そして学術雑誌に毎月、毎月掲載される物理定数の通常の確定作業ですら、絨毯やカーテン取り付け職人の行う採寸とあまり大差がないことを熟知している舞台裏で地道に働く人たちにとって、数学的正確さが実験室の中で実証されるなど戯れ言にしか聞こえないであろう。物理学には、誤差の確率的（蓋然的）大きさを査定するための認知された方法である最小自乗法というものがある。この方法によって誤差を実際の測定値よりも小さくすることができるということは広く認められている。しかし、この理論によっても、誤差を無際限に小さくすることなどは考えられもしない。したがって、どれほど精緻に構築されたものであったとしても、ある連続量がある確実な値をとるといったような言明は、測定以外の何ものかを土台にしているに違いない」(C.P.6.44, The Doctrine of Necessity Examined, 1892)<sup>(8)</sup>。

## 7. 曖昧な対象を容認する意図とbruteness

パースが曖昧な物体を容認しようとする意図は、引用文の冒頭に示されている通り、必然主義を否定するためである。（現在では決定論の方がなじみ深い表現であるが、先のハドソンが、充足理由律擁護のために挙げた「必然主義」と無縁ではない。）曖昧な対象によって必然主義（決定論）が否定されるのは、ごく簡単な構図で説明できよう。

たとえば、運動エネルギー(E)、物体の質量(m)、速度(v)の間で成り立つ自然法則の方程式は「 $E = 1/2mv^2$ 」で表されるが、このとき、曖昧な対象の質量mが不確定な値 ( $b \pm 0.1g$ ) をとるならば、それに応じて出力される運動エネルギーも不確定な幅を持った値となる。実際には、質量の幅の中からの一つの数値が作用することになるのだが、それがはたして $b+0.01g$ なのか $b-0.08g$ なのかは、確率でしか予測することができず、したがって運動エネルギーの数値も確率によってしか、つまり具体的にいうならば、ガウスの誤差法則に従ったベル・カーヴをなす数値の連なりのごとき、としか予測ができない。これこそ、決定論の土台を揺るがす反論になるとパースは考えたのである。

さて、先ほど、曖昧な対象を認めることは、充足理由律を否定し、brute fact

の存在を認めることになる、と述べた。そこに上述の議論を重ねあわせると、パースが考えるbrute factのbrutenessとは、この確率的な変動、つまり曖昧な対象が持つ広がりをもった連続量の値のことを意味していることが理解できよう。

brute factを容認する哲学者も少なくはないが、積極的にそれを認めるというよりは、仕方なく認めざるを得ないという論調のものが多い。その理由として、彼らが考えるbrute factの典型である定数や基本的原理の「強固な確定性、動かし難さ、あらゆる説明の要求を拒否する強制力」などが障害となっていると考えられる。brute factを積極的に擁護するルイスの場合も同様であり、宇宙の中の粒子の数、無次元の物理定数の値などが、他の値ではなく一つの値 (one value rather than another) でなければならぬと説く (Lewis1986:129ff)。それは彼の様相実在論が、あくまでも可能世界意味論の土壌から生まれたものであることから要請でもあるだろう。

しかし、brute factのbrutenessを確定性 (determinacy) として理解するルイスとは異なり、パースはそれを不確定性、曖昧さとして捉え、それが世界に充溢していると考える。目の前にある普通の物体の長さや重さも、わたしたち自身の身長や体重も、そしてそれらの運動や相互関係を司る自然法則の中に含まれる定数も、すべて不確定性と曖昧さを内包している。したがって、それらの「もの」が動き、相互に反応しあうことこそが、この世界の内実を作り上げているとするならば、この世界そのものが不確定性と曖昧さに満ちた不断の生成として理解されることになる。ルイスが可能世界意味論からの要請によってbrute factのbrutenessを確定性として理解したとするなら、パースは自身の「進化論的宇宙論」 (evolutionary cosmology) の要請からbrutenessを不確定性、曖昧さとして理解したのである。<sup>(9)</sup>

## 8. 曖昧な対象を肯定する論拠 —(1)経験科学の観点から—

さて、この引用文からも明らかなように、パースが曖昧な対象を肯定する第一の論拠は、(1) 経験科学から導き出されている。そしてそれは、(2) 数学的な論拠、(3) 論理的な論拠によって補強されうると論者は考える。

まず(1) 経験科学からの論拠であるが、それは単純に、わたしたちがある対

象の連続量を測定するとき、誤差は決してなくなりはないという事実を元に行っている。わたしたちは通常、

$$\text{測定値（不確定値）} - \text{誤差} = \text{真の値（確定値）} [= \text{対象の固有な連続量}]$$

と考え、それが、目の前にある対象の長さや重さは確定的であるに違いないという日常的な感覚もしくは信念の土台になっている。

しかし、パースが強調するのは、たとえメートル原器のような対象であっても、その誤差なしの真の値を精確に知りえた者は、未だかつて一人もいないという事実である。確かに、測定の精度を上げていけば、測定値のばらつきは次第に収まっていくが、そのことは、対象の真の値が確定的なものであるということの保証とはならず、「測定以外の何ものかを土台にしているに違いない」のである（たとえば、彼はそれを、「神学的独断」とすら呼ぶこともある）。

## 9. 曖昧な対象を肯定する論拠 — (2) 数学的観点から —

けれども、測定という操作によっては、確かに誤差なしの真の値を知ることが不可能かもしれないが、対象そのものは確定的な真の値を持っているのではないかという反論が考えられる。そこでパースが依拠するのが、(2) 数学的な論拠である。

先の引用文で、「連続量」(continuous quantity) という言葉が再三現れていることに注目したい。この連続量とは、もちろん、数学における「連続体」(continuum) と「量」というカテゴリーに由来している。パースが引用文の冒頭で「ある連続量は、ある一定の正確な値を持つ」という必然主義の前提を批判する本意は、「連続体を量というカテゴリーにあてはめるならば、必ず、そこに不確定性が生じる」という主張をしたいがためなのである。(連続体について詳しく説明する余裕はないが、パースが実無限 [現実的無限] を斥け、可能無限 [潜在的無限] を擁護していたこと、またライブニッツの「無限小」[infinitesimal] の概念を高く評価していたことは記しておきたい<sup>(10)</sup>)。

ところで、自然科学の提示する世界観では、この世界に存在するもの同士は、

「量」というカテゴリーを介して相互に関わる。そして、その量というカテゴリーを介したものの同士の相互作用こそが、この世界を形作っているとするならば、この世界そのものが不確定性を帯びざるを得ないのである。

## 10. 曖昧な対象を肯定する論拠 — (3) 論理的観点から —

しかし、それでもなお、曖昧な対象を肯定するために越えなければならないハードルがある。それは、先のライブニッツ、そしてルイスの個体概念を説明するときに述べた、ある個体の概念の内には、矛盾する述語が内在してはならず、もしそうであるならば、その個体は端的に「非存在」である、というテーゼである。これをクリアするためにパースが提出するのが、(3) 論理的な論拠である。

先にも述べたように、曖昧性を対象に属するものと考え、その対象の概念は以下のような曖昧な述語を含むことになる。

$$VP = P_1 \hat{P}_2 \hat{P}_3 \dots \hat{P}_n \quad (P_1 = a - 0.1\text{mm}, \dots, P_n = a + 0.1\text{mm})$$

ある一時点において、その対象が  $a - 0.1\text{mm}$  でもあり、 $a + 0.1\text{mm}$  でもあるというのは明らかな矛盾である。しかし、それをパースは次のような主張をなすことによって乗り越えようとする「矛盾律が適用されないかぎり、あらゆるものは曖昧である」(C.P.5.448, Issues of Pragmaticism, 1905)。<sup>(11)</sup>

先にも少しふれたが、パースは連続体に関して潜在的無限の立場を取る。したがって、曖昧な述語VPは無限に連なる潜在的なPという述語の連言として理解される。そのような曖昧な述語VPに矛盾律が適用されるときとは、ある一時点において、その対象の実測値が測定されるときである。しかし、実際に測定されないときには、未だ矛盾律は適用されていないという点が、パースの最も強調したい点なのである。さらに、曖昧な述語を構成する個々のPという述語は、以下のように表現されるべきであろう。

P = 「ある時点におけるXの長さは  $a + 0.01\text{mm}$  であるだろう」

(X's length would be  $a + 0.01\text{mm}$ .)

つまり、個々の述語で使用されるコブラは、反事実的条件法 (counterfactuals) で表されるものでなければならない。もしそこで直説法 (will be) を用いるならば、それが、たとえ未来の出来事であったとしても、既にそのときには矛盾律が適用されてしまっている確定的な事実を示すことになる。したがって、その時点において矛盾する述語が個体概念に内在することとなり、直説法で表された述語の連言としての曖昧な述語を内在する個体は非存在となってしまうからである。

実は、パースがプラグマティズムの確立において最も心を砕いたのが、この反事実的条件法による命題の表現であった。<sup>(12)</sup> 一つの個体が曖昧なものであることを肯定するためには、矛盾する述語の連言として理解される曖昧な述語が個体に内在することを認めねばならない。この難題をかろうじてクリアできるのが、反事実的条件法で表される述語とそれへの矛盾律の不適用 (というよりは、適用保留) だったのである。

## 11. 不確定な世界を探求する端緒としてのvaguenessとbruteness

ここで、パースが確率論において「傾向性説」(propensity theory) をとることを思い起こすと、vaguenessとbrutenessの関係が明瞭になると論者は考える。

ある理想的なサイコロでそれぞれの目が出る確率が  $1/6$  であるということは、傾向性説によれば、そのサイコロ (正確にいうならば、「ある条件下で、そのサイコロを振るという事態」) が六つの目を等しく出すような「傾向性」を内在させているということになる。そのとき、「6」の目が出る確率とは、ハッキングの表現をそのまま借りると「それが可能であったとして、まったく同じ投げ方と条件で複数回サイコロを投げたときに6が出るであろう相対頻度」(the relative frequency with which the dice would fall six in tosses of a certain sort, were they possible) のことである (Hacking 1990:208)。

ここで、曖昧な対象の連続量が、ガウスの誤差曲線で表されるような数値をとり、そのうちのどの数値が実際に測定されるかは不確定、すなわち確率としてしか予測できないことを思い起こしてみると、まさしく対象の性質とは、その対象

に内在する確率的な傾向性として理解されるのである。それこそが、曖昧な対象に内在する曖昧性であり、その傾向性が「ある特定の時点において」どのような事態を出現させるかを説明できないbrutenessにほかならないのである(C.P.1.405)。

このように、まったく同じ条件であっても、ある事態が複数の後続する事態を引き起こす可能性をはらんでいることを、パースは「絶対的偶然」(absolute chance)と呼ぶ。ここで、古典的確率論において「無差別の原理」(the principle of indifference)が、別名「不充足理由律」(the principle of insufficient reason)と呼ばれていたことを思い出してほしい。パースが曖昧な対象を積極的に肯定したのは、充足理由律を否定し、brute factを擁護すること、そしてそのbrutenessとは曖昧で不確定な確率的事象が世界に充溢しているという事態そのものであるということを主張するためにほかならなかつたのである。

このように考えるとき、充足理由律を否定することは、(多くの哲学者たちがそう考えがちのように)世界の存在理由に対する説明の放棄ではない。むしろ、目の前にありふれているごく普通のものたちが実は「曖昧な対象」であることを認識すること、すなわち先入観に囚われないvaguenessとbrutenessの認識こそが、不確定性に満ちた世界を探求する端緒を拓くことを可能にするのだと論者は結論づけたい。

## 注

(1) 本論は、論者が哲学会第四十六回研究発表大会(東京大学文学部、2008年10月25日)で行なった「世界の不確定性について」という発表を元にしてている。その際の質疑応答において、貴重な示唆を与えてくださった松永澄夫、一ノ瀬正樹、高山守(以上、東京大学)の各氏にあらためて感謝の意を表したい。また司会を務めてくださった伊佐敷隆弘氏(宮崎大学)に、発表の前後において貴重な示唆と提言をいただいたことにも感謝の意を表したい。そして、日々の研究活動において指導と助言を仰いでいる山本精一、重永哲也の同僚各氏にも感謝したい。これらの方々の示唆と助言のもとに本論は成立しているのだが、本論に寄せられる責が論者に帰すべきものであることはいうまでもない。

また、本論を校正作業中に、論者の恩師である坂部恵氏の訃報に接した。哲学することの敬

- びを論者に教えてくれた坂部氏の死を深く悼み、この拙論を氏に捧げたい。優しい師であった。
- (2) これら brute fact の問題については〔乗立2006〕で論じた。また後述のルイスとパースの比較や、「誤差」の概念を含めた不確定性についての議論は〔乗立2007〕を参照のこと。
- (3) 正確には、アンガーが、充足理由律を擁護するものとしてルイスの様相实在論を評価し、それに対する反論として、ルイス自身が充足理由律を否定し、brute fact を肯定したという時間的順序がある。
- (4) ここで充足理由律について付言しておきたい。充足理由律という概念図式を作ったのはもちろんライブニッツではあるが、それを擁護するためには必ず彼の「述語の主語への内在説」をとらねばならないというわけではない。実際に、充足理由律を現代において復活させようとしているノージックは、先に挙げた豊穰性仮説と、「自己説明的」(self-explanatory) な原理という概念を導入することによってそれを支えようとしている。また、レッシュャーは「可能性」概念の変革を試み、「実在的な可能性」(real possibility) の概念を提出している。両者がとりわけ興味深いのは、因果的な説明における推論の形式そのものを大胆に改造しようと試みている点である。また、かなりの高い確率で、将来、充足理由律を定式化する新たな理論が、哲学者だけではなく、物理学者たちの間から出てくる可能性がある。

このような事情を鑑みると、充足理由律の問題を考えるときに、ルイスのような特異な哲学者の議論を、「述語の主語への内在説」という形式に無理矢理押し込めようとするのは、ルイス、ライブニッツ双方の正確な理解という基準に照らし合わせて問題があると思えるかもしれない。しかし、論者がライブニッツの図式にこだわったのは、現代の哲学者や物理学者たちが新たに提案しつつある充足理由律の定式化と比べても、ライブニッツのそれが、最もすっきりしており、汎用性と安定性が高いと思われるからである。言ってみれば、ライブニッツの図式は、他のさまざまな提案をテストする、最も基本的な「試薬」といえる。その試薬のテストで、ルイスの議論は（本人の思惑とは懸け離れて）「擬陽性」の反応が出たと考えられるのではないだろうか。もちろん、その後の「精密検査」が行なわれるべきではあるが、ルイスに限らず、現代の哲学者や物理学者たちが提出する新たな理論についても、まずはライブニッツ流の試薬での簡易検査が施されるべきであろう。

このように論者が考える理由は、充足理由律のような問題に整合的な解釈を与えるためには、単一の理論だけでそのすべてを覆い尽くすことは不可能で、(ときには、一見して矛盾しているかにみえる理論同士をも組み合わせる) 幾重にも理論的な裏付けをしなければならないと考えるからである。その場合、充足理由律のある側面に適合する理論が、別の側面ではまったく

機能し得ないという可能性も考えられが、それでもなお、その理論は充足理由律の裏付け（もしくは批判）に寄与しているのである。プラグマティズムが、ある学説の妥当性を吟味する際には基本的にこのようなスタンスをとるが、この点については本論ではふれない。

またライプニッツの充足理由律および述語の主語への内在説に関しては、発表者の同僚である重永哲也氏から貴重な示唆を受けた。ここに感謝したい。

- (5) もちろん、充足理由律に対して肯定的な態度を取ることに何の問題もない。ただし、先に挙げたハドソンが指摘するように、そのコストが高くつく可能性は十分にある。
- (6) 「個体についての」とパースが限定しているのは、それ以外の領域においてライプニッツが唯名論的ではないところもあり、その両者の緊張関係に彼が注目しているからである（C.P.6. 393）。たとえば、無限という概念の理解についてライプニッツの数学と形而上学が示す緊張関係については、（岡本 1991）を参照のこと。
- (7) 曖昧な対象を擁護するために、「赤」のような漠然とした広がりを持った性質ではなく、むしろ「点性質」（point property幅を持たない性質）に注目したローゼンとスミスの議論は、パースの着眼点と重なるところがあり、大いに参考になった（Rosen & Smith 2004）。また、「曖昧性という事態の实在」という観点は、（一ノ瀬 2005）から大きな示唆を受けた。（もちろん本発表でいう「曖昧な対象の实在」と、一ノ瀬のいう「曖昧性という事態の实在」との異同については、さらなる考察が必要であることはいうまでもないが）。
- (8) このパースの文章を、ハッキングは以下のように的確にまとめている「われわれの測定も、それによって測定されるものも、その究極の〈实在〉（reality）はガウスの誤差法則の形式を取る。銀行の預金残高や信用台帳は正確かもしれないが、自然界の諸定数はそういうわけにはいかない、とパースは言った。デカルトの時代以来やってきたような、商店主の取引を元にして世界をモデル化しようとするのを止めようではないか」（Hacking 1990:214、邦訳317頁 [但し訳を多少変えている]）。
- (9) 哲学者としてのパースが世界の不確定性を主張するとしたら、科学者、技術者としてのパースは「制御しえないbruteness」を「制御しうるbruteness」へと変えることは可能かということ課題にしていた。具体的には、あるランダムさ（制御しえないbruteness）に、別の種類のランダムさを掛け合わせることで、それらを制御可能なものへと変換するランドマイザー（randomizer）に関する先駆的研究がそれである。
- (10) パースの連続体に関する議論は、（Putnam 1995）および（伊藤 2006）を参照のこと。また、パースは充足理由律を批判しながらも、ライプニッツ哲学全体のプログラムについては

肯定的である。それは、充足理由律を抜きにしたライブニッツ哲学の再構築を提案したルノーヴィエへ注意を促していることから分かる (C.P.6.393), (Renouvier 1899:41 note29)。

- (11) この論文でパースがおこなっている「曖昧性」をめぐる議論については、ウィリアムソンの詳しい分析がある (Williamson 1994:46ff.)。
- (12) その典型的な議論は以下で為されている。‘A Survey of Pragmaticism’ (C.P.5.464-496, 1907). また、(Hacking 1990:208)、(伊藤 1985) の133頁以降も参照のこと。前者では、パースが、反事実的条件法を確率概念の柱とすることによって、彼の理論が深化したことが示されている。後者では、パースが、対象に内在する性質を「would-be存在」という実在的な存在者 (実在的な可能性 real possibility) として理解していたことが詳しく説明されている。

## 参考文献

- Hacking, Ian (1990), *The Taming of Chance*. Cambridge University Press. (邦訳『偶然を飼いならす－統計学と第二次科学革命－』石原英樹・重田園江訳、木鐸社、2003年)
- Hudson, Hud. (2008) *The Metaphysics of Hyperspace*, Clarendon Press, Oxford, (first published in 2005).
- 石黒ひで (1984) 『ライブニッツの哲学』、岩波書店。
- 一ノ瀬正樹 (2005) 「自然主義的認識論のゆらぎ ー制度と曖昧性をめぐる考察」(哲学会編、哲学雑誌『自然主義と反自然主義』有斐閣、2005年、所収)。
- 伊藤邦武 (1985) 『パースのプラグマティズム』、勁草書房。
- 伊藤邦武 (2006) 『パースの宇宙論』、岩波書店。
- Leibniz, G. W., *Die philosophische Schriften*, hrg. Gerhardt, 7vol., 1875-1890. (参照の際にはG.と略記)
- Lewis, David. (1970), ‘Anselm and Actuality’ in Lewis (1983), *Philosophical Papers*, Vol.1., Oxford University Press. pp.10-25.
- Lewis, David. (1986), *On the Plurality of Worlds*. Blackwell Publishing.
- Lewis, David. (1993). *Many, but almost one*. In J. Bacon, K. Campbell, & L. Reinhardt (Eds.), *Ontology, causality and mind*. Cambridge University Press. (Reprinted in *Papers in Metaphysics and Epistemology*, Cambridge University Press, 1999). (柏端達也、青山拓央、谷川卓訳「たくさん、だけど、ほとんど一つ」『現代形而上学論文集』、勁草

書房、2006年、所収)

乗立雄輝 (2006) 「根拠なく受け入れねばならない事実について」(哲学会編、哲学雑誌『レヴィナス—ヘブライズムとヘレニズム—』有斐閣、2006年、所収)。

乗立雄輝 (2007) 「世界はなぜ、このように存在しているのか」(『RATIO 03』、講談社、所収)。

Nozick, Robert. (1981), *Philosophical Explanations*. The Belknap Press of Harvard University Press. (邦訳『考えることを考える』上・下、坂本百大・戸田山和久他訳、青土社、1997年)

岡本賢吾 (1991) 「無限の理論の系譜学 実体のシステムから集合のシステムへ」(『現代哲学の冒険 (9) ゲームと計算』、岩波書店、所収)。

Peirce, Charles. S. (1931-1958), *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce*: Vol.1-6, edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss, 1931-35; Vol.7-8, edited by Arthur Burks, Cambridge/Mass, Harvard University Press, 1958. (この文献からの引用は慣例に従い、前の数字で巻数を表し、後の数字でパラグラフ番号を表した)

Putnam, Hilary. (1995), 'Peirce's Continuum', in Ketner, Kenneth Laine. (ed.), *Peirce and Contemporary Thought*, Fordham University Press.

Renouvier, Charles. (1899), *La Nouvelle Monadologie*, Armand Colin&C, Paris.

Rescher, Nicholas. (1984), On Explaining Existence. in Hales, Steven D (ed.), (1999), *Metaphysics: Contemporary Readings*. Wadsworth. pp.7-25. ([original] *The Riddle of Existence*. Lanham, MD: University Press of America. 1984)

Rosen, Gideon and Smith, Nicholas J. J., (2004), 'Wordly Indeterminacy: A Rough Guide', in Jackson, Frank and Priest, Graham (eds.) (2004), *Lewisian Themes: The Philosophy of David K. Lewis*. Oxford University Press. pp.196-209.

Unger, Peter. (1984), 'Minimizing Arbitrariness: Toward a Metaphysics of Infinitely Many Isolated Concrete Worlds', *Midwest Studies in Philosophy*, 9 (1984), pp.29-51.

Williamson, Timothy. (1994), *Vagueness*, Routledge.